

## アメリカ宗教保守と移民問題（要旨）

松本佐保（名古屋市立大学）

本来キリスト教は、遍的的で包括的である筈なのに、米国では宗教保守・右派と呼ばれるキリスト教団体が、白人至上主義的で移民や難民への排他主義的に傾向にあるのはなぜなのか？この問いについて歴史的な分析を行うと共に、現在のトランプ政権下での大統領令による「イスラム教徒への入国制限」、また今年夏シャーロットビルで起きた白人至上主義団体による人種的暴力事件などについても言及する。こうした宗教や人種に関わるポピュリズムは、近年グローバルに展開する傾向にあり、多文化共生のデモクラシーを脅かす要因として注目されている。そのため米国のポピュリズムに焦点をあてその解明を試みる。

この人種差別的な政策によってトランプ大統領選出に大きく貢献したスティーブン・バノンの存在が注目され、彼の白人至上主義ニュース・ネットワークのブライトバートとの繋がりが取り沙汰された。彼は大統領上級顧問の座を辞するが、その政権への影響は継続しているとも言われる。

アメリカの宗教右派・保守についての研究は英語ではかなり存在し、また人種・移民政策についてはもっと多くの研究がある。しかしこの宗教右派・保守と人種・移民問題をクロスさせた研究、宗教とエスニシティとの関わりについての John Green の研究があるものの、移民政策を関連付けた研究はあまり存在しない。そこで本報告では大統領選挙の鍵を握る宗教保守・右派の形成過程をレーガン大統領選出の1980年に立ち返り考察し、現在のトランプ政権の宗教と移民政策をクロスさせて考察を行う。移民政策という内政問題が中心となるが、イスラエルを熱狂的に支持する共和党の支持基盤であるキリスト教シオニストとその人種主義的な側面も明らかにする。

第一部：トランプが大統領に選出された2016年選挙を宗教票とエスニシティを関連づけて、前回の2012年選挙と比較しつつ、誰がトランプを支持するのか明らかにする。

第二部：カーターは南部バプティスト教会、福音派の牧師経験があり、彼らの支持を受けて民主党の大統領として選出された。しかし彼の人権的な内政や外交は、保守的で白人中心の南部バプティスト連盟を失望させ、1980年大統領選挙では共和党のレーガンが南部バプティスト連盟を中心にいわゆる宗教右派・保守票を動員することに成功する。この選挙で宗教票動員を組織したのが、この白人中心の南部バプティスト連盟出身でカリスマ牧師となる、ジェリー・ファルエルである。彼は自らの組織「モラル・マジョリティー」を結成し、以降宗教票右派・保守を共和党の票田とし、さらにリバディ大学を設立して白人中心の宗教右派・保守の人材育成も行った。彼の死去後はその息子、カリスマ牧師ジェリー・ファルエル・ジュニアが、この宗教エンバイヤーを引き継ぎ、2016年のトランプ大統領選出に貢献した。第三部：米国のカトリック保守について、スティーブン・バノンを中心に、リベラルな現教皇フランシスコとの対立、また移民排斥政策の関りを、バノンが関与する欧州のキリスト教保守のネットワークと、その移民排斥政策との関係を明らかにする。